

女と男の肩書

下

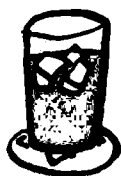
藤堂志津子



女と男の肩書

下

藤堂志津子



女と男の肩書 下

平成三年四月二十五日 第一刷

著 者 藤堂志津子
とうどうしずこ

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二
電話東京(〇三) 三二六五局一二二一

本文印刷 精興社 付物印刷 凸版印刷

製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります

© Shizuko Tōdō 1991
ISBN 4-16-312440-3

Printed in Japan

女と男の肩書

下

A 装
D 幀
坂 松
田 本
政 孝
則 志

札幌の花見は、円山の北海道神宮の境内でおこなわれる。

桜はエゾヤマザクラ、ソメイヨシノ、ヤマザクラの三種類で、たいがい五月十日前後に満開を迎え、人々は花見にくり出す。

札幌の花見にジンギスカン鍋はつきもので、家族連れ、学生の一団、職場の仲間同士など、ビール・シートを敷いたそれぞれの輪から立ちのぼってくる匂いは、たいがい羊の肉を焼くそれである。

昔は家庭でもよくジンギスカン鍋を食べたものだが、最近はおっぱら屋外用の料理になってしまった。寒冷地施工住宅という、すきま風防止の密閉式家屋が普及し、そういう家でジンギスカンをやると、脂のまじった煙が家具や壁を汚し、へたをすると何カ月もその匂いが抜けなくなったりする。

ジンギスカン鍋はビールとセットになって、本州からの観光客に喜ばれる夏むきのメニューだけれど、団体客相手のそうした店で出す羊肉を、北海道人はあまり好まない。脂身の部分が多すぎるし、肉そのものが固い。

花見のジンギスカンにしても、食べ盛りの学生たちは質より量とばかりに、マトンを買って

るけれど、主流は仔羊^{ラム}である。

ラムとマトンの違いは、ひと言、羊の若さで、おのずと肉質は老いたるものより、若いほうがおいしい。人間と同じである。

ジンギスカン鍋に乗せる野菜にきまりはない。つけ汁もさまざまな流儀があって、これ、とは言いきれないし、スキヤキ風に玉子をからめて食べる方法もある。肉にしても、はじめからタレに数時間つけておき、味のしみこんだ肉を焼いて食べたりもする。

ジンギスカン鍋は、じつに北海道的におおらかにして、大雑把な鍋物である。要は、羊の肉さえその中心になっていれば、ジンギスカンと呼ばれる。こまかなことは、いっさい問わない。

今年の桜の開花は例年より二週間近く早く、四月末の連休のうちに花盛りになってしまった。こちらでは、桜と梅の咲く時期は同じである。

五月一日の火曜日、神宮支店でも、有志が集まって花見の宴を催すことになった。

言い出したのは桑山と西崎である。昼休みに話がまとまり、その夜に実施、の急スピードで、これは札幌の花見の特徴かもしれない。桜がすぐに散ってしまうし、雨でも降ったなら、その散り方はもっと早くなる。また今年の五月の連休は三日から四連休で、休みあけを待っていたなら、時期をのがしてしまう。

花見に参加した管理職は葉村だけだった。

桑山たちは他の課長や次長、副支店長の後藤にも声をかけたのだが、冗談まじりに返ってきたのは、「だれに見られているか分らない」であり、それ以上の本音は「寒い」とのことだった。

札幌の夜の花見は寒い。日中とはともかく、いったん日が沈むと気温はぐんと下がり、いくら飲み食いでもエネルギーを補給しても、毛糸のジャケットが欲しくなる。

寒さにふるえながらジンギスカンを食べ、ビールを飲む。

風邪をひくかもしれない。

それでも境内は、夜の花見の宴を楽しむ人々にぎわっている。

ラム肉によるジンギスカン鍋を皆がひと通り食べ終えたなら、慶子も早々に引きあげるつもりだった。寒くてたまらない。

葉村は桜田美加など窓口係の女性たちと軽口をたたきあい、笑い興じていた。得意先課の男たちと一緒にときよりも、ずっとくつろぎ、口調もなめらかだった。きれぎれに伝わってくる「型押し」のイタリアン・カット・パンプス」だの「ケリー・バッグ」、^①「クレージュの小指のファッション・リング」などといったファッション用語は、とても五十代男性の言葉とは思えない。美容院を経営している妻の影響だろうけれど、それにしても、よくもこまかく知っているのには驚く。気がつくとき、そんな葉村に見つめ入っているのは慶子だけではなかった。桑山や西崎も、いつのまにか会話をやめ、やや底意地の悪さを秘めたまなざしをむけていた。

表面上は和解したかのように見えて、じつは、まだまだしこりを残しているらしい。

葉村の一体どこが勘にさわるのか、得意先課の男性たちの心理が慶子にはよく分らない。

「葉村課長」西崎が声をかけた。

「ビールばかりもなんですから、どうですか、日本酒？」

「あ、いいねえ、それは。少しだけでもらおうか」

身体を西崎たちのほうにずらした葉村に、すかさず桑山が質問を浴びせかけた。

「前々からおたずねしたかったのですが、課長の仕事観なり人生観、また価値観なるものは、どういうものなんでしょうか」

「おや、マジじゃないの」

どちらが二十代なのか、まるで反対の物言いである。

「そうだなあ、私はね、桑山君、あんまりそういう大義名分をかかげる生き方はしていないのね」
「ずうっとそういう考え方ですか」

「いやいや。私もきみぐらいの齡としの頃は、そりゃあ、もう、大騒ぎさ。仕事に対して、いつだって大騒ぎ」

西崎が冷ややかに言い放つ。

「課長でしたら相当にハチャメチャだったでしょうね」

西崎の言葉に、葉村は深々とうなずく。

「そう、ハチャメチャだったね。仕事ひとすじで、ほら常務取締役の佐木さんともかなり喧嘩もしたし、やはり今の取締役の石田さんとも派手にやりあった。もちろん、仕事上の意見の食い違いでね」

一瞬、その場は沈黙になった。

桑山や西崎が、かすかに息を呑み、たじろいだ気配が感じられた。

葉村の口から、いとも無造作に常務取締役などトップ・クラスの人々の名前が吐き出されたからである。

葉村はそうした雰囲気にはいっこうにおかまいなしで、コップの冷や酒をおいしそうに飲んでいる。

さらに懐かしさをこめた調子でつづけた。

「佐木さんは今はあんなふうにすっかり温厚になったけれど、昔はすぐ頭に血がのぼるタイプで、私も血気盛んな若僧、会議のさなかに取っ組みあいになったこともあったなあ。でも、佐木さんには可愛がられ、よくしてもらった……。石田さんは、佐木さんと正反対な真面目いっぽん

の人でねえ……」

だれもが神妙に耳を傾けている。

葉村の口調は自慢のひびきもなく、あくまでも、のどかな思い出話の耳あたりのよさを保ちつづける。

自分の平凡な在りようにハクをつけるために、著名な人々の名前を並べ立て、いかにも親しい間柄のようにひけらかす人々を、慶子は涉外先で何人も見ているけれど、葉村の懷古談には、そういう心配はみじんもなかった。

桑山が感心して、というより探りを入れるまなざしでたずねる。

「葉村課長は大変な人脈をお持ちなんですね。それなのに、なぜ……」

葉村がいたずらっぽく訊き返す。

「なぜ課長どまりなのか、こう言いたいのだろうか？ 簡単なことだよ。私は出世コースより、自分の家族や人生のほうを選んだ。つまり気楽に生きたいと」

そして葉村は十年前に妻を亡くしたときのこと、死に目にも会えなかった仕事一点張りの日々、ふたりの子供を抱えてのやもめ暮らし、再婚のいきさつなどを、やはり淡々と語った。

「最初のワイフには本当にすまないことをしたと、今でも後悔している。そのぶん、と言うのはおかしいが、現在のワイフは私にとってはまさにベター・ハーフとして大切にしたいし、子供たちも、もう社会人だが、結婚するまでは親子四人で仲良く暮らしてゆきたい、こう思っているんだ」

「いいわねえ」こう反応したのは若い女性行員たちである。

「でも、男として、それじゃあ、つまらなくないですか」不可解な表情をむけたのは、西崎たち二十代の男性たちである。

木村だけは、葉村に尊敬の視線をそそいでいた。

花見は八時でお開きになった。

北海道神宮の境内使用がその時刻までだからである。

葉村は日本酒がきいたのか、やや足もとをふらつかせながらも、機嫌よく帰って行った。

だが、たった一時間の宴会、しかもまだ八時なのに終了とは、二十代の若者のエネルギーは不満をくすぶらせていた。

「ススキノで飲み直しましょう」

西崎の提案に、ジンギスカン鍋や紙コップなどの後片づけがすばやくなされる。

帰るつもりだった慶子は、桜田美加にしっかりと片腕をとらえられてしまった。

「先輩、久しぶりに一緒に飲みましょうよ」

集合場所はススキノの大きな居酒屋である。

円山公園前からタクシーに分乗し、その店に集まってみると、人数は半分に減っていた。やはり寒さがこたえたらしく、風邪をひきそうだと言って帰ってしまったらしい。

慶子も身体の芯まで冷えていて、ストッキングにフラット・シューズをはいた足の指は感覚を失っている。トシなのだ、としみじみ思う。この冬も、昨年よりもひときわ寒さが身にしみたし、これほどまで足がこごえてしまうことなどなかった。

連休のあいだのススキノは、観光客の散策の場としてにぎわっても、店自体はひまである。

皆が集まった居酒屋も、予約もしていなかったのに十数名が一堂にすわれる小上りがあいていた。

西崎がメモ用紙とボールペンをまわして、それぞれの注文の品を書かせる。ジンギスカンをたらふく食べたはずなのに、タコの中から揚げや、サケとマヨネーズを具にした巻き寿司、もずく酢、

ジャンボ・シューマイなどが、メモ用紙にびっしりと書きこまれてゆく。

しかも飲み物は、ここでもまたビールのジョッキである。そんなに食べられるのか、ビールでおなかを冷やしすぎないのか、慶子はつい口出ししそうになったが、老婆心、の文字が頭に思い浮かび、押し黙る。

「ね、先輩」

隣にすわっている桜田美加が小声で話しかけてきた。

「鈴木さんのキタキツネ集団、何やらあぶないことやりそうだという噂、聞いてますか？」

「あぶないこと？」

「ええ、真相はさだかではないのですけれど、どんどん仲間が集まって、鈴木さんの部屋はアジトみたいになっていくとか。で、夏の組合総会にむけて、バクダンを仕掛けるつもり……本当のバクダンじゃありませんよ、バクダンの発言」

「まさか」

鈴木は盲腸炎の手術をして退院したばかりである。また鈴木あの部屋の雰囲気は、そういう過激さはちらりとも漂ってはいなかった。

桜田美加はつづけた。

「この話は、かなり広まっているみたいです。高村さんたちの集まりでも噂になっていましたから」

「そんなに噂になっているの」

慶子は、まるで自分もその集団の一員のように、腋の下がうっすらと汗ばんでくる。

「噂といっても、まだ私たちのあいだだけで、課長たちは知らないと思います」

違うのだ、慶子は即座に否定したかった。鈴木たちがやろうとしているのは、多少の狂信性は

おびているにしろ、まったくのボランティア活動にすぎない。

夏の組合総会で物騒な行動を起こすなどとは考えられなかった。無口で黒っぽい服装を好む「カラスの子」たちにすぎないのだ。

慶子を真ん中にして、もう一方の側にいた西崎が、やはり小声で口をはさむ。

「僕もその噂聞いてます」

耳のいい男である。女ふたりの会話は、まわりには聞き取れないはずのささやきのはずなのに、しっかりと「お耳ダンボ」をやっていたらしい。ダンボというのは、デイズニー・アニメーションの、耳の大きな仔象の名前である。ダンボはこの耳で空さえとぶ。

西崎の隣にすわっている木村が、慶子にだけそれと分る心配そうな目で、こちらを見ている。だがこの場で慶子が鈴木たちの集団を弁護し、噂を打ち消すわけにはいかなかった。

もしそれをすれば、どうして慶子が鈴木たちの内情に、そこまでくわしいのか、メンバーのひとりなのか、メンバーではないとしたなら、どうして鈴木たちの集団についての事情通なのか、疑問に思われるだろう。

その場合は嘘をつくしかない。

しかし、これ以上のごまかしはしたくなかったし、だいいち、嘘に嘘を重ねてゆくと、どこかで辻褄が合わなくなりそうで、自信が持てない。スパイ活動については、一生、沈黙を守っていたかった。

「噂よ、噂、そういうのは」

慶子は精一杯、笑いとばそうとする。

「でもですよ、清田支店では、その鈴木という女性、おキツネさまと呼ばれているそうじゃないですか」

西崎が真顔で言う。

桜田美加は用心深く口をつぐんでいる。「平成会」の女性行員の動きは、いまだに一部の管理職と集会に参加した女性たちだけの秘密にされていた。

世間的な体面上、肩書組が無言を保つのは当然かもしれないが、参加した女性行員の口の固さには、慶子と富岡も感心しているのである。たいがい、どこから、しぜんとめれるものなのに、あのシンブル・過激派だった佐藤摩樹たちも、慎重に口をつぐんでいるらしい。

多分、それは不気味さなのだろう。沢本厚子の結婚退職には裏がある、うっすらと感じているに違いなかった。

「富岡さん、どうでしょう」

慶子はススキノの居酒屋を途中で抜け出し、平岸の富岡の家に行った。

事前に電話をかけ、富岡の在宅と都合をたずねてから、タクシーをとばしたのだった。

今夜の富岡は、いつになく地味である。室内着ともナイティともつかない、黒くて長い袋を、首の部分だけ大きく切り裂いた筒型の服をてろりとまとっている。素材はジャージーらしく、全体的に、どことなくずり落ちそうな印象を受ける。また化粧をすっかり落とした目は充血し、顔色も悪い。

「噂ねえ、困ったこと……」

言いながら、富岡はティッシュを箱からつまみとって鼻をかむ。

「一体、だれがそんな噂を……」

言ったとたん、富岡は二枚目のティッシュを目に当て、身体をまるめて「クローツ」という声とともに泣き出した。

「ど、どうしたのですか」

数分後、富岡は立ち直っていた。

「今年はついていないわ。四人キープしていた男のうち、これでふたり目よ、逃げられたのは。そう、さっきまでその男、ここにいたの。あなたの強さについて行けないなどとぬかして」

「でも、まだおふたり残っているし、それに町田さんだっているじゃないですか」

「ふたり残ってはいればいいという話じゃないの。一挙に四人、この栄光を味わった者でなければ、この空虚さは分らないでしょうね。しかも四人をランク付けするなら、上位ふたりに逃げられたのよ。町田さんはね、確かに歯応えのある岩のような男、食いつく前に、私の前歯が折れそう。ま、それだけ食い足りる男ではあるけれど……で、噂の件だけど」

慶子は感心する。

これほどまで切り換えの早い女性がいるだろうか。公私混同して平然と銀行を男性獲得の手段に使いながら、男に逃げられたと泣きながらも同時に仕事は忘れない。この公私混同ぶりには脱帽する。

「ほら、塚本さん、聞いているの」

「は、はい」

「……だから、私としては鈴木さんに、とりあえず忠告したいわけ。しばらくはおとなしくして
いるようにと」

「同感です」

「じゃ、行きましょう」

富岡は立ち上る。

「どこへですか」

「もちろん、おキツネさまのアパートよ」

富岡は居間を出て寢室へむかう。

鏡台の前の椅子に腰かけ、何本も並んでいる口紅の中から真紅を取り上げると、唇の輪郭を無視した大胆さで塗りはじめた。鮮やかな色が、実際の唇より数ミリはみ出した形で描かれてゆく。「うむ、よし、ワイルド・タッチ。塚本さん、噂を消すには、もうひとつの噂が必要だとは思わない？」

鈴木の説得には慶子があたった。

その夜も彼女のアパートの部屋には、「カラスの子」たちが十名近くいて、キタキツネ・グッズの作製に励んでいたため、近くの喫茶店に誘ったのである。

「その噂は鈴木さんたちにとっては、とてもマイナスになると思うの。それにこの話が上の人たちの耳に入ったなら、それこそ沢本厚子さんの二の舞いよ」

盲腸炎の手術後、またいちだんとはっそりとして薄幸そうなイメージが強調された鈴木は、物静かに慶子の言葉を聞いている。

「おキツネさまのお告げ」さえ口走らなければ、ごく普通のOLと変わらない。

「まずは、鈴木さんの部屋に人を集めないこと、計画中のボランティア活動も一時的にストップすること。ね、しばらく様子を見てみましょう」

鈴木は淋しげな微笑を片頬に浮かべた。

「心ない中傷をする人って、いるのですよねえ。きっとここで私が銀行を辞めればいいのでしょうけれど、おキツネさまは、ごく当り前の生活をしている人々の味方ですから、それはどうあっても避けたいことです。ただ同じ考えで集まってきてくれている仲間を思うと、私は卑劣な真似はしたくないんです」

「鈴木さん、こういうカムフラージュはどうかしら」

富岡が身を乗り出してくる。真紅の唇を、まるで金魚のようにパクパクさせて説明しはじめる。鈴木のもとに、少なくとも二十代行員が集まっているという点が残しておく。ただし、目的は組合総会うんぬんではなく、新しいクラブ結成のためとする。

開陽銀行には、すでに野球、スキー、バレー・ボール、卓球の運動クラブがあり、茶道、華道のクラブの歴史も長い。そこに鈴木たちが、あらたに有志をつのってクラブを作っても、何の不思議もないではないか。

これが富岡の言う「新しい噂」である。

しかも行内の公報誌「ひらく」に堂々とクラブ紹介として掲載してもらえばいい。本部に認知させてしまうのである。

つまり万が一、何かの問題が生じて、本部もその片棒をかついたとなれば、そうあからさまに攻撃はできないだろう。

鈴木表情がたちまち明るくなった。

「でも、どんなクラブですか？……」

慶子は、鈴木たちのキタキツネ・グズ作製の光景を思い浮かべる。

「裁縫クラブというのは、どうかしら」

「裁縫？ 少し古めかしいんじゃない？」

富岡が言う。

鈴木が首をかしげる。

「でも、私たちのグループは体育系じゃないですし、どちらかというと内省的ですし、まあ、おとなしい人たちが多いんです」